

教育研究業績書

2025年4月1日

氏名 下見 千恵 (印)

教育上の能力に関する事項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例	2002 年度および 2003 年度	・母性の特性と保健（2年次前期開講，1単位）において，2000年度広島県重点研究（研究代表；後藤幸子教授）で行った研究結果について講義を行い，リプロダクティブ・ヘルス支援に関する内容を学生に還元した。
	2005 年度	・母性看護実習（3年後期開講，3単位）において，対象理解を深めるための臨地実習での臨床講義を実施した。また，臨地における医師による臨床講義をコーディネートした。
	2005 年度以降	・科目ごとにオフィスアワーの設定 ・担当科目シラバスおよびコースカタログの web 公開 ・母性看護方法論Ⅱ（3年前期開講，2単位）において，3次元 CG 周産期診断教育システムを使用し，主に分娩機転の理解に役立てた。 ・母性看護方法論Ⅱ（3年前期開講，2単位）において，毎回の授業終了時に「授業の感想または質問」を記載するシャトルペーパーを配布し，授業内容や方法の資料とした。学生の授業内容の理解度を知り，次回授業で強化補完する内容を反映させた。
2 作成した教科書，教材	2004 年度以降	・講義コマごとに補強のための資料（プリント冊子）を作成。
	2009 年度以降	・関連実習要綱の作成および見直し
3 当該教員の教育上の能力に関する大学の評価	2005 年以降	・学生による授業評価では，学科平均に比し高得点を得ている。自由記載では，「講義資料が実習に活かせる」「講義資料がわかりやすい」「いろんなテキストを使ってわかりやすい」等の評価を得ている。
	2013 年	・学生による授業評価では平均 3.2（4点満点中）で，「資料や授業の進め方が丁寧でわかりやすかった」「グループワークも有効だった」との評価を得た。
	2022 年度	学生の授業評価は，いずれの科目も「満足度は 5 以上」と学科平均に比し高かった。

4 その他	2013 年 年度および 2014 年度	【学内委員会】 研究推進委員会，高等教育推進部門委員 会，入学者選抜委員会等
職務上の実績に関する事項	年 月 日	概 要
1 資格，免許	1988年5 月12日 1989年1 月12日 1989年6 月2日 2013年3 月1日 2015年9 月2日	看護師免許取得（第 622145 号） 受胎調節実地指導員認定講習修了 助産師免許取得（第 92399 号） 日本周産期・新生児医学会新生児蘇生法「専門」 コースインストラクター取得（認定番号：I -13-01968） 「臨床研究の基礎知識講座（旧 臨床研究入門初 級編）」臨床研究教育サイト「ICR臨床研究入門 （略称：ICRweb）」修了認定（第 14410 号）
2 特許等		なし
3 実務家教員についての特記事項		なし
4 その他		
1) 三原看護専門学校，非常勤講師	2001年6 月-7月	・母性看護学援助論 I（10時間/30時間）
2) 広島県看護協会主催 「看護研究サポート」講 師	2005 年 10 月 15 日 2006 年 11 月	・広島県内の臨床看護職者約50名を対象に看護研 究の基礎について講義した。看護研究を進めるに あたり，各々のテーマに沿った助言を行った。ま た継続して，研究指導にあたった。 ・研究発表会への出席と研究への講評
3) 広島県立倉橋高等学校主催「性教育講演」講師	2005 年 11 月 30 日	・高校生2年生および3年生を対象に，STDの近年 の動向やその予防について講演した。
4) 広島県立瀬戸田高等学校主催「進路フォーラム 」講師	2005 年 12月9日	・高校生1年生および2年生を対象に，看護職に関 する教育制度や看護職の活躍の場等について概 説し，高校生に理解できるレベルで専門的な内容 の講義を行った
5) 比治山女子中学・高等学校「大学模擬授業」	2007 年 10 月 25 日	・高校生40名を対象に，看護職に関する教育制度 や看護職の活躍の場等について概説し，高校生に 理解できるレベルで専門的な内容の講義を行っ た。
6) 2008年度広島県看護協会教員養成講習会，講 師	2008年6 月-7月	・看護教育方法演習（16時間／75時間） 受講者40名

7) 高大連携公開講座「母子看護学入門」	2008年8月2日	・高校生を対象に、高大連携事業として母子看護学について演習を行った。
8) 地域連携事業 三原チャンネル健康情報番組	2008年7月16日-8月30日	・「妊婦さんの普段の生活で気をつけたいこと」「妊娠中のくつの選び方」の2番組について企画立案
9) 助産学専攻科開設準備委員会	2008年4月-2009年3月	・県立広島大学助産学専攻科2009年度開設に向けた委員会委員
10) 三原市立宮浦中学校主催「性教育講演」講師	2011年6月24日	・性教育講演「大切にしたい十代のからだ性とSTDってなんだろう？」をテーマに中学3年生129名を対象に講演した。
11) 県教育委員会による被災地支援への協力	2011年8月9日	・被災地の高校2年生3名に対し、助産学専攻科や助産師になるためのコース等について説明、相談に応じた。
12) 新人助産師集合研修（看護協会主催）講師	2012年～2015年	・新人助産師研修「分娩監視装置の装着と判読」のテーマで講演した (2012年受講者数15名) (2013年受講者数16名) (2014年受講者数20名) (2015年受講者数21名) 受講者による授業評価(看護協会主催：3点満点)では、「研修の満足度；2.69」「達成度；2.65」「理解度；2.65」と高い評価を得た。
13) 全国助産師教育協議会「2012年度助産学臨床指導者および専任教員研修」	2012年9月25日-26日	・全国助産師教育協議会「2012年度助産学臨床指導者および専任教員研修」の実習施設として、実習生1名受け入れ指導を行った。
14) 新生児蘇生法（Bコース）開催（公認番号13-0214-B-34）	2013年6月7日	・助産学専攻科学生12名に対し、新生児蘇生法認定講習を開催した（他インストラクター有資格者2名と共同）。学生12名全員が合格し修了認定された。
15) 論文の引用実績	2015年9月現在	・論文の引用実績：書籍1編，論文13編(資料①)
16) 研究費の取得状況	2020年4月現在まで	・外部研究資金獲得状況：12件（うち，7件研究代表者）(資料②)
17) 新生児蘇生法公開講座，インストラクター	2017年から現在	1) 2017年3月 2) 2018年3月 3) 2019年3月

		4) 2020年,2021年コロナで中止 5) 2023年3月
18) 非常勤講師, 呉看護専門学校	2019年	母性看護学概論, 15時間
19) 広島県看護協会看護研究サポート講師	2020 年 度	臨床看護職への講義, 研究指導, 研究発表講評など
20) 修道大学ひろしま協創高校ガイダンス, 模擬授業担当	2021 年 11月	高校2年生24名, オンライン授業「新生児・赤ちゃんの話」
21) 2022年度 常翔学園中・高校、常翔啓光学園中・高校における「中高大連携教育プログラム：常翔啓光学園中学校 K1クエスト」	2022年7 月	中学2年生39人「生まれたての赤ちゃんのバイタルサイン」
22) 瀬戸内高校出張講義連携教育プログラム	2022 年 12月	2年生31名「広島県瀬戸内高等学校ー看護への招待ー」

I 学術論文等

概要

著書	単著 (0) 冊 、 共著 (1) 冊
学術論文	(13) 編
国際会議(査読付)発表	(18) 件
報告・調査	(7) 編
紀要	(6) 編
国際会議(査読無)発表	(0) 件
国内学会発表	(70) 件
その他 (翻訳等、区分も記載すること)	[区分] (0) 編

詳細

学術論文等の名称又は演題名等	単著・共著又は単独・共同の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称と開催地	概要
(著書) 1. 看護実践の根拠がわかる 母性看護技術	共著 北川眞理子・谷川千絵編	2015年10月20日	メヂカルフレンド社	「妊娠末期の妊婦のケア」について分担執筆 助産学生向けではなく、看護学を学ぶ学生の母性看護学の理解を深める内容。 母性看護で用いる看護技術を援助過程に沿ってその方法と根拠を示し、看護技術の学習効果を高めることを目指した内容となっている。 299 ページ、執筆箇所 73-88 ページ
(学術論文) 1. 授乳時の褥婦の姿勢における Evidence-Based Nursing (原著：査読付)	共著	2001年9月	Quality of life journal 日本QOL学会論文, 2(1), 95-111P	褥婦の入院生活で使用頻度の高いのは“授乳椅子”である。ところが、現在使用されている授乳椅子は、スツールやソファやベンチ形式の椅子など多様で、授乳行為を支えるべき椅子への配慮はないのが現状である。今回、椅子との関係を動作解析および筋電図検査を実験的に行い至適寸法を抽出した。これらのデータから、授乳時の褥婦の姿勢における Evidence-Based Nursing を明らかにした。 担当部分：データ分析 共同研究者：後藤幸子、 <u>下見千恵</u> 、平岡敦子、大川洋子 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
2. 産褥早期における母親の母乳分泌量の受け止め方 (原著：査読付)	共著	2003年3月	母性衛生, 44(1), 105-109P	褥婦および看護者を対象に、産褥早期における母乳分泌について調査した。看護者の評価と比較検討し、母親の母

《筆頭論文》				
3. ピアエデュケーションによる健康講座の実践的検証 (査読付)	共著	2003年9月	思春期学, 21(3), 302-309P	<p>乳分泌に対する自己評価についてその特性を示した。産褥早期の母親は、必ずしも自己の母乳分泌について看護者と同様の評価をしておらず、過大評価や過小評価をしている者が約半数であった。一方、看護者と評価が一致していた褥婦は、母子相互作用場面で最も安定していた。これらの結果から、産褥早期における看護のあり方を検討した。</p> <p>共同研究者：下見千恵，竹中和子，片山美香，清水凡生 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p> <p>若者を対象に、看護学生による性に関する健康講座を行った。ピアエデュケーションの手法を用い、計3回の健康講座を実施した。受講者および健康講座を実施した看護学生を対象に、ピアエデュケーションによる健康講座の評価について調査を行った。その結果、受講者のほぼ全員がピアエデュケーション手法を高く評価しており、今後の思春期の健康教育のあり方として有用であることが考察された。</p> <p>担当部分：データ収集 共同研究者：蔵本美代子，平岡敦子，下見千恵，後藤幸子，住吉史子 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>
4. 若者が受けた性的嫌がらせの経験と心理的状態 (原著：査読付)	共著	2003年12月	母性衛生, 44(4), 379-384P	<p>若者を対象に性的嫌がらせ(性暴力を含む)を受けた経験と現在の心理状態に関する実態調査を行った。その結果、性的嫌がらせを受けた経験は女性58人(24.7%)、男性9人(4.5%)の合計64人(15.5%)であった。つまり女性の24.7%が性的嫌がらせを受けた経験をもつことは、全女性の4人に1人が何らかの性的嫌がらせを受けた経験を有すると言える。加えて、性的嫌がらせを受けた場合の、適切な相談窓口が不足していることも明らかになった。</p> <p>担当部分：データ分析，データ収集</p>

<p>5. 修士論文 分娩期における唾液中分泌型 IgA の動態と産婦のストレス緩和に関する研究</p>	<p>単著</p>	<p>2004 年 2 月</p>	<p>修士論文（広島大学大学院保健学研究科）</p>	<p>共同研究者：鈴木江三子，<u>下見千恵</u>，平岡敦子，坂梨薫，後藤幸子 （共同研究につき本人担当部分抽出不可能）</p> <p>分娩期における唾液中 sIgA の動態について分析し，分娩期における産婦の sIgA の変化要因について検証した．①分娩期における sIgA は分娩進行とともに上昇する傾向が示された．②sIgA は経産婦より初産婦のほうが高い傾向があり，産婦の sIgA の分娩既往による格差について傾向が示された．③分娩期における一部の時間帯において，看護職者の実務経験年月による sIgA の有意な差が確認された． 著者：<u>下見千恵</u></p>
<p>6. 分娩期における唾液中の分泌型 IgA 濃度の変化と産婦のストレス要因に関する研究 （原著：査読付）</p>	<p>単著</p>	<p>2004年 6月</p>	<p>助産学会誌, 18 (1), 29-36P</p>	<p>分娩期の唾液中sIgAの動態を明らかにし，産婦（18人）のストレス要因を唾液中のsIgAを用いて，家族という人的環境から検討した．家族の付き添い時間が産婦の唾液中sIgA濃度と正の相関があったことから，家族の付き添い状況が産婦のストレスに関連している一要因である可能性が示唆された． 著者：<u>下見千恵</u></p>
<p>7. 周産期女性における唾液中分泌型 IgA 濃度の縦断的研究－経膾分娩事例と帝王切開事例の比較－ （原著：査読付） 日本母性衛生学会 2006 年学術奨励賞推薦論文</p>	<p>単著</p>	<p>2007年 1月</p>	<p>母性衛生, 47 (4), 643-648P</p>	<p>妊娠期から分娩期および産褥期まで，縦断的にストレス状態を反映する唾液中のsIgA濃度を測定した．対象者は40名（VD34名，CS6名）で，唾液中のsIgA濃度について経膾分娩事例と予定帝王切開事例間で比較検討した．VDでは，分娩期において唾液中sIgA濃度は分娩進行とともに妊娠期に比し有意に上昇し，産褥期には妊娠期の値に復した．これに対し，CSでは分娩に至るまでsIgA濃度はほとんど変化しなかったが，産褥期では著しく上昇した．以上のことから，分娩陣痛を有する分娩期において唾液中sIgA濃度は一時的に上昇することが示唆された． 著者：<u>下見千恵</u></p>

<p>8. 博士論文 周産期における唾液中および母乳中分泌型 IgA 濃度に関する研究</p>	<p>単著</p>	<p>2007年3月</p>	<p>博士論文（広島大学大学院保健学研究科）</p>	<p>周産期における唾液中分泌型 IgA (sIgA) を縦断的に分析し、その動態について基礎的データを得ること、またその特徴から、母乳中 sIgA について変動要因を探ることを目的とした。対象は、妊娠期に異常がなく、正期産で分娩に至った妊産褥婦 104 名であった。その結果、(1)唾液中 sIgA 濃度は、経膣分娩事例では分娩直後変化しなかったのに対し、帝王切開分娩事例では分娩直後著しく増加した。(2)帝王切開分娩事例の母乳中 sIgA 濃度は、経膣分娩事例より高濃度であった。(3)産科的要因によって、母乳中の sIgA 濃度に差はなかった。以上より、分娩様式によって、唾液中 sIgA 濃度の動態は異なることが明らかとなった。また、分娩様式が母乳中 sIgA 濃度に影響する可能性が示唆された。 著者：<u>下見千恵</u></p>
<p>9. A longitudinal study of changes in salivary sIgA during pregnancy and the puerperal period, focusing on differences between vaginal birth and cesarean section (原著：査読付) 《筆頭論文》</p>	<p>共著</p>	<p>2008年12月</p>	<p>Journal of Japan Academy of Midwifery, 22(2), 170-179P</p>	<p>本研究では妊娠期から産褥期の母の唾液中sIgA濃度について、縦断的な基礎データを得て、帝王切開分娩と経膣分娩のストレス状態を比較することを目的とした。健康な妊婦61名（CS19名，VD42名）を対象とし，sIgA濃度を enzyme immunoassay 法で定量した。妊産褥婦の唾液中sIgA濃度は，分娩様式によってその動態が異なることが明らかになった。妊産褥婦の時期には，そのストレス評価について特に分娩様式などの要因を考慮する必要がある。 共同研究者：<u>下見千恵</u>，田丸政男，竹中和子，田中義人 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>
<p>10. EARLY PUERPERIUM INVOLUTION OF THE UTERUS AFTER CAESARIAN SECTION: BASIC DATA FOR USE IN AN ASSESSMENT INDEX (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2016年12月</p>	<p>Journal of Japan Academy of Midwifery, 30(2), 333-341 P</p>	<p>帝王切開後の子宮復古について経目的変化を明らかにし，子宮復古状態のアセスメントのための基礎的データを得ることを目的とした。帝王切開後の子宮底長は経膣分娩と比べ明確に異なっていた。</p>

《筆頭論文》				
11. 未就学児をもつ母親の飲酒実態と飲酒動機に関する面接調査 (査読付き)	共著	2021年1月	母性衛生, 61 (4), 622-630P	<p>正期産かつ単胎で術後順調な、極めて一般的でスタンダードな帝王切開事例を前提とした本研究結果は、産褥早期におけるCS後の子宮復古に関する基礎的データであり、評価基準の一つとなりうる。</p> <p>共同研究者：<u>下見千恵</u>，竹中和子 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p> <p>0～6歳児をもつ母親の飲酒実態と飲酒動機を明らかにすることを目的に41名を対象に調査を行った。飲酒する者は68.3%であり先行研究と比し高かった。飲酒量では、妊娠前と現在とで正の相関があった ($r=0.731$, $p<0.001$)。飲酒の有無は、初飲年齢および就労と関連があった。飲酒習慣者率は、34.1%であり全国調査における女性の飲酒習慣者率と比べ約4倍高かった。、飲酒習慣者は妊娠前も飲酒習慣者である者が多く、授乳中にも飲酒する傾向が示された。</p> <p>共同研究者：<u>児玉史乃</u>，<u>下見千恵</u> (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>
12. Theory of Planned Behavior (計画的行動理論) を用いたビンジ飲酒の影響要因に関する文献レビュー	共著	2023年	日本保健医療行動科学会雑誌 38 (1), 43-51P	<p>一機会の多量な飲酒(以下ビンジ飲酒)の対策を検討するため、Theory of Planned Behavior(以下TPB)を用いたビンジ飲酒に関する諸外国の文献レビューを行った。</p> <p>EBISCO host(CINAHL complete, MEDLINE, PsycARTICLES, PsycINFO)を用いて、キーワードに“binge drinking” “the theory of planned behavior”、除外ワードに“adolescent”を設定し、2010～2019年で学術誌に限定した結果、14件(横断研究3件、縦断研究8件、介入研究3件)が対象論文として抽出された。ビンジ飲酒行動に最も強く影響したのはTPBで「行動意図」、TPB以外で「過去のビンジ飲酒」であった。また、ビンジ飲酒行動意図に最も</p>

<p>13. 何らかの問題飲酒を有する20-30代就労女性の自己のビンジ飲酒に対する信念</p>	<p>共著</p>	<p>2024年</p>	<p>日本健康学会誌, 90 (3), 81-90P</p>	<p>強く影響したのはTPBで「態度」「道徳的規範」, TPB以外で「自己同一性」であった。介入研究では, TPBの構成概念を基盤に「実施意図」や「信念メッセージ」を用いた検証が行われたが, ビンジ飲酒行動に一貫した効果はなかった。介入検証は3件と少なく, 対象も大学生に限定されているため, 今後, 対象層を拡大しながら介入方法の検討が必要と考えられる。 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p> <p>本研究は, 問題飲酒が軽度な状況にある20-30代就労女性の自己のビンジ飲酒に対する信念をTheory of Planned Behavior や Integrated Behavioral Modelで用いられる「行動信念」「規範信念」「効力信念」「行動コントロール信念」から質的研究で明らかにした。8名のインタビュー調査から, 20-30代就労女性のビンジ飲酒に対する行動信念には, 社交や高揚感を楽しむといったポジティブな面と, 身体的な不調や金銭的調整を必要とするネガティブな面があった。これらの結果をもとに, 今後20-30代の働く女性のビンジ飲酒を抑制する要因の検証や実験研究について検討していく。 共同研究者: 岡田ゆみ, 下見千恵, 山田隆子. (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>
--	-----------	--------------	--------------------------------	--

<p>(国際会議(査読付)発表)</p> <p>1.Improving support for reproductive health a survey of health-related counseling by Women' s Centers (査読有り)</p>	<p>共著</p>	<p>2001年8月</p>	<p>Japan Academy of Nursing Science Fourth International Nursing Research Conference , Mie(Japan)</p>	<p>日本における全国の婦人相談所に寄せられる相談内容を分析した。近年ドメスティック・バイオレンス等の対応を担っている婦人相談所に、健康問題が多く寄せられていた。中でも性と生殖に関する健康問題の占める割合が大きい点を指摘し、女性のリプロダクティブ・ヘルスの新たな相談窓口の必要性を提案した。 共同演者：下見千恵，鈴木江三子，坂梨薫，平岡敦子，住吉史子，後藤幸子</p>
<p>2.The experience of sexual abuse among young people and the emotional condition of victims (査読有り)</p>	<p>共著</p>	<p>2001年8月</p>	<p>Japan Academy of Nursing Science Fourth International Nursing Research Conference , Mie(Japan)</p>	<p>若者への性と生殖の健康支援のあり方を探ることを目的に、若者を対象に性暴力を受けた経験の有無等について実態調査を行った。その結果、男女ともに性的嫌がらせを受けた経験をもつ者が存在し、特に女性の場合その割合が多いにもかかわらず、適切な援助がなされていないことがわかった。これらのことから、支援のあり方を検討した。 担当部分：データ分析，データ収集 共同演者：鈴木江三子，下見千恵，坂梨薫，平岡敦子，住吉史子，後藤幸子</p>
<p>3.Women' s Sexuality and Reproductive Health : support activities by the Nursing Association and issues for development (査読有り)</p>	<p>共著</p>	<p>2001年8月</p>	<p>Japan Academy of Nursing Science Fourth International Nursing Research Conference , Mie(Japan)</p>	<p>看護協会長を対象に、都道府県レベルの看護協会が行っている「女性の性と生殖の健康」の支援活動の実態調査を行った。その結果、看護協会における「女性の性と生殖に関する健康支援」の企画が少ないことが明らかになった。一方で、前向きに住民に開かれたサービスを展開しようとする姿勢が伺えた。これらの課題から、具体的な企画の考察を行った。 担当部分：データ分析，データ収集 共同演者：坂梨薫，平岡敦子，鈴木江三子，下見千恵，住吉史子，後藤幸子</p>
<p>4.The Dilemma of Increased Caseloads at Child Health Center (査読有り)</p>	<p>共著</p>	<p>2001年8月</p>	<p>Japan Academy of Nursing Science Fourth International Nursing Research Conference , Mie(Japan)</p>	<p>リプロダクティブ・ヘルス/ライツの観点から「生涯を通じた女性の健康支援」事業が行政レベルで推進されている。そこで18歳未満の児童のあらゆる問題についての相談に応じる全国の175箇</p>

<p>5. Reproductive Health Support Looked at from the Functions and Role of Women's Counseling Centers (査読有り)</p>	<p>共著</p>	<p>2002年4月</p>	<p>ICM (International confederation of Midwives) 26th Triennial Congress, Vienna</p>	<p>所の児童相談所を対象に、リプロダクティブ・ヘルスの視点から活動内容に関する実態調査を行った。 担当部分：データ分析，データ収集 共同演者：平岡敦子，坂梨薫，鈴木江三子，<u>下見千恵</u>，住吉史子，後藤幸子</p> <p>日本における婦人相談所の機能と役割を概括し，婦人相談所によせられる相談内容から女性の健康問題を明らかにした。ドメスティック・バイオレンス (DV) 防止法の施行に伴ない婦人相談所の役割は大きくシフトしてきている中，女性の特に性と生殖に関する健康問題が多く寄せられている実態から，ニーズに対応できる新たなサービスの必要性を示した。 共同演者：<u>下見千恵</u>，平岡敦子，住吉史子，鈴木江三子，坂梨薫，蔵本美代子，後藤幸子</p>
<p>6. Secretary IgA Concentrations in saliva of parturients : comparison of vaginal delivery with caesarean section (査読有り)</p>	<p>単著</p>	<p>2005年5月</p>	<p>International Council of Nurses (ICN) 23rd Quadrennial Congress, Taipei</p>	<p>ストレス指標である唾液中 sIgA について，経膈分娩と帝王切開の事例を比較検討し産婦における基礎データを得た。産婦の唾液中 s IgA は個人差が大きく，また経膈分娩した産婦の唾液中 s IgA は分娩進行とともに徐々に上昇する傾向を示したが，帝王切開の産婦ではほとんど変化がなかった。 著者：<u>下見千恵</u></p>
<p>7. Comparison of sIgA Concentration in Breast Milk according to mode of Delivery (査読有り)</p>	<p>共著</p>	<p>2008年6月</p>	<p>ICM (International confederation of Midwives) 28th Triennial Congress, Glasgow</p>	<p>本研究では，経膈分娩と帝王切開で母乳中の sIgA 濃度を比較分析した。帝王切開の母乳中 sIgA 濃度は経膈分娩より有意に高かった。 術後の唾液中 sIgA が高濃度であることが報告されているが，帝王切開の母乳中 sIgA が高濃度であった理由は明確ではない。しかし，麻酔薬の母乳移行は微量で母乳を中断する必要はないと報告されており，帝王切開においても早期に母乳を与えることは免疫学上意義深いこと</p>

<p>8. Influence of Experience of Childbirth and Parenting for Mother During Early Puerperal Period (査読有り)</p>	<p>共著</p>	<p>2008年6月</p>	<p>ICM (International confederation of Midwives) 28th Triennial Congress, Glasgow</p>	<p>が確認された。 共同演者：<u>下見千恵</u>，竹中和子</p> <p>母親の分娩体験と育児観について産褥早期の褥婦（初産婦 34 人，経産婦 34 人）を対象に調査した。分娩体験と育児観は妊娠期における母親であるという自覚および分娩や育児行動への不安と関連があった。特に初産婦では妊娠期における何らかの教育的サポートが出産や育児行動を支援すると考えられた。 担当部分：データ分析，データ収集 共同演者：竹中和子，<u>下見千恵</u></p>
<p>9. The responses of the psychological preparation using Puppet doll for children undergoing measuring blood pressure (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2008年11月</p>	<p>The Fourth Pan-Pacific Nursing Conference & The Sixth Hong Kong Nursing Symposium on Cancer Care, Hong Kong</p>	<p>子どもに対する血圧測定のプレパレーションの精神的な効果について検証した。6-10歳の子ども10名を対象に、ビデオによる画像からその効果を行動学的に分析した。コントロールに群に比し、プレパレーション実施群では安定した表情で、コンプライアンスの高い反応を示した。プレパレーションは医療行為を実施する際、小児にとって良い精神的効果をもたらすと考えられた。 担当部分：データ分析，データ収集 共同演者：松森直美，<u>下見千恵</u></p>
<p>10. A basic survey for assessment of health of postpartum females - Involution of the uterus following a Caesarean section - (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2013年5月</p>	<p>International Council of Nurses (ICN) 25th Quadrennial Congress, Melbourne</p>	<p>日本では帝王切開率が増加傾向であり，帝王切開（CS）は無視できない分娩形態である。子宮復古は分娩後の女性の健康状態をアセスメントする上で極めて重要であるが，CS後の子宮復古については十分に検討されておらず，アセスメントのための明確な指標はない。そこで，本研究ではCS後の子宮底長の変化の特徴について明らかにするために，経膈分娩（VD）と比較検討した。 共同演者：<u>下見千恵</u>，藤井宏子</p>
<p>11. Maternal health and</p>	<p>共著</p>	<p>2014年6月</p>	<p>ICM (International</p>	<p></p>

<p>midwifery care - Assessment of involution of the uterus (査読あり)</p>			<p>confederation of Midwives) 30th Triennial Congress ,Prague</p>	<p>産褥期の子宮復古現象は、助産師がアセスメントすべき重要項目である。子宮復古の状態を知るために用いる触診は簡便で非侵襲的な技術であり、実践的に用いる臨床的手法である。子宮復古アセスメントに役立てることを目的に、まだ明確になっていない帝王切開事例の触診データを分析した。 共同演者：<u>下見千恵</u>，藤井宏子，竹中和子</p>
<p>12. Maternal parenting stress during first year after childbirth: Influence of parenting experience and social support (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2014年6月</p>	<p>ICM (International confederation of Midwives) 30th Triennial Congress ,Prague</p>	<p>母親の well-being への支援の一つとして、育児ストレスおよび生後1年間における影響要因について調査した。健康な児をもつ母親7名を対象に、PSI (日本語版育児ストレス尺度)と育児に関する思いを分析した。育児経験や社会的サポートの有無によってPSIが有意に異なった。育児経験は、母親が子どもの行動や精神的状態を予測することを促進していると推測された。母親のストレスは、活用可能な産後の育児支援資源がいつも依頼できる環境によって、減少できることが推測された。 担当部分：データ分析 共同演者：竹中和子，<u>下見千恵</u></p>
<p>13. Literature review of decision-making process and nursing care in prenatal diagnostic tests (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2015年7月</p>	<p>The ICM Asia Pacific Regional Conference 2015 (第11回ICMアジア太平洋地域会議・助産学術集会) ,Yokohama</p>	<p>近年、無侵襲的出生前遺伝学的検査等に対する社会の関心が高まっている。出生前診断を考える妊婦のケアの在り方を検討するために、検査の是非を決定した妊婦の気持ちとケアについて文献検討した。検査を受けない人へのケアに関する文献は圧倒的に少なかった。受けない妊婦に関しては、受検する妊婦同様、葛藤を抱えており、妊婦の迷いや思いに寄り添う等のケアが必要である。 担当部分：データ収集および分析，総括 (corresponding) 共同演者：石川真季子，<u>下見千恵</u></p>
<p>14. The infant behavior directing gaze toward</p>	<p>共著</p>	<p>2016年7月</p>	<p>The 31st International Congress of Psychology , Yokohama</p>	<p>As an aid to support the early development of</p>

<p>mother in natural settings as role in supporting the development of self-regulatory functions. (査読あり)</p>				<p>self-regulatory functions, this study investigated about the infant behavior of directing gaze toward mother in natural settings. One healthy infant and his mother agreed to participate in this study, and was observed in the natural context of their homes, at age of 5, 6, 7 month for approximately 30 min per session. 担当部分 : データ収集 共同演者 : Kazuko Takenaka & <u>Chie Shitami</u>.</p>
<p>15. Differences in Involution of the Uterus according to Gestational Age : How much difference? (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2017年3月</p>	<p>20th East Asian Forum of Nursing Scholars , Hong Kong</p>	<p>The phenomenon of the uterine involution is a large physiological and also morphological change, and observation is important and required when deciding on nursing care. There was no significant difference in the height of uterine fundus between term delivery and premature delivery until day 5 in the puerperal period. However, there was a large difference on day 6 and day 7, the level of premature delivery was lower (average: about 2 cm) compared to term delivery (p<.05). 共同演者 : <u>Chie Shitami</u> & Kazuko Takenaka.</p>
<p>16. Study on Support for New Midwives Dealing with Work-Related Stress and Anxiety. (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2019年1月</p>	<p>22nd East Asian Forum of Nursing Scholars, Singapore</p>	<p>To identify difficulties new midwives experience when they start a job and how they cope with them, and to explore various methods of support that can be provided to new midwives based on their experiences. Here it was found that proper advice from senior midwives encourages new midwives, leading to their independence at work. Our findings show that support for new midwives can be best provided by ensuring their work is properly</p>

<p>17. Pilot Study Regarding Job-Related Difficulties and Methods of Overcoming Them for New Midwives.</p>	<p>共著</p>	<p>2020年1月</p>	<p>The 23rd East Asian Forum of Nursing Scholars, Chiang Mai</p>	<p>evaluated by senior midwives. 共同演者 : <u>SHITAMI. C</u> & TAKENAKA. K.</p> <p>By gradually refining question items based on results obtained from an interview survey, we have created a survey questionnaire regarding the difficulties new midwives face in this development process and methods of overcoming them. Here we report on the results of a pretest that targeted young midwives using this questionnaire. Difficulty factors that were job-related and perseverance factors related to emotional support had significant effects. Our research recommends the following. Emotional support should be provided as even young midwives who make mistakes in their work can overcome these challenges. In particular, the existence of peer midwives is important. In addition, breaks are effective for midwives employed for less than one year. 共同演者 : <u>SHITAMI. C</u> & TAKENAKA. K.</p>
<p>18. Experimental verification of simulated experience program of infant crying for young adults</p>	<p>共著</p>	<p>2021年7月</p>	<p>32nd International Congress of Psychology. Prague, on-line</p>	<p>Objective This study investigated to effect of experience of simulation of infant care behavior using a life-like infant doll to readiness for parenthood of young adult, by three laboratory methodologies.</p> <p>Methods Participants were 6 female childless undergraduate students, were randomly allocated to exposure to three laboratory methodologies (successful experience group, biofeedback group, and control group). Their responses toward the crying of a life-like infant doll with a speaker,</p>

				<p>were included ECG and self-report. The study was reviewed and approved by Ethical Committee for Epidemiology of Hiroshima University(E-1539).</p> <p>Results</p> <p>After intervention, the LF/HF ratio of participants of successful experience group significantly decreased ($p < 0.0001$, Wilcoxon signed rank test), and on the other groups, the LF/HF ratio of participants of only one in the group significantly decreased ($p < 0.05$, Wilcoxon signed rank test). Many of the participants had realistic awareness of crying infant on simulated experience, and to be aware of their own emotions experienced through their relationship with the crying infant doll, and an opportunity to broaden the image also to what will be experienced in the future parenting situation.</p> <p>Conclusions</p> <p>Findings provide possibility that this simulated experience program using a life-like infant doll will be contributing to nurturing parenting ability of childless young adults. Limitations of this study is that the sample had been not entirely representative of the desired population. This work was supported by JSPS KAKENHI Grant-in-Aid for Challenging Exploratory Research (Grant Number 15K15854)</p> <p>共同演者：TAKENAKA, K. & SHITAMI, C.</p>
<p>(報告・調査)</p> <p>1. 幼児期における情緒形成の基礎的研究</p>	<p>共著</p>	<p>1999年4月</p>	<p>平成10年度厚生科学研究(子ども家庭総合研究事業)報告書, 100-107P (473頁)</p>	<p>本研究の目的は、乳幼児の気質的行動特徴と保護者の養育姿勢や育児意識等について新生児期から縦断的に調査し、発達初期における子どもの情緒形成に影響する因子を明らかにすることである。</p>

2. 幼児期における情緒形成の基礎的研究	共著	2000年4月	平成11年度厚生科学研究(子ども家庭総合研究事業)報告書, 100-106P (557頁)	<p>る。本論文では、研究の第一段階として健康な新生児とその母親(18組)を対象に、心身の状態・対児感情・育児意識等に関する質問紙調査と看護者による新生児行動特徴評定・授乳場面における相互作用評定を行った。担当部分：データ分析, データ収集 共同研究者：竹中和子, <u>下見千恵</u>, 清水凡生</p> <p>新生児期(第1回調査：健康な68組の新生児とその母親が対象)と乳児期前期(第2回調査：第1回調査で同意の得られた33名の母親を対象)における乳児の行動特徴と、母親が捉えている乳児の性格や養育姿勢との関連について検討した。その結果、乳児期前期までに、乳児の行動特徴は、母親の身体生理状態が反映しており、今後わが子の個性がより明確に認識されるようになると実際の養育姿勢として示されると考えられた。 担当部分：データ分析, データ収集 共同研究者：竹中和子, <u>下見千恵</u>, 片山美香, 清水凡生</p>
3. 幼児期における情緒形成の基礎的研究	共著	2001年3月	平成12年度厚生科学研究(子ども家庭総合研究事業)報告書, 153-159P (703頁)	<p>新生児期(第1回調査)と乳児期前期(第2回調査)を踏まえ、1歳時における子どもの行動特徴と養育者(母親と父親)がとらえている子どもの性格や育児意識、養育姿勢との関連について縦断的に調査検討した。子どもの行動特徴に対する両親の認知は必ずしも一致していなかった。また行動特徴は、両親の養育姿勢や育児行動に反映していることが示唆された。 担当部分：データ分析, データ収集 共同研究者：竹中和子, <u>下見千恵</u>, 片山美香, 清水凡生</p>
4. 全国の婦人相談所かの現状からみた「女性の性と生殖の健康」支援に関する課題	単著	2001年3月	平成12年度広島県重点研究報告書「性と生殖の健康を支援するためのモデル開発—県民のためのリプロダクティブ・ヘルスサービスの支援体制づくりの基礎調査—」第2節 13-22P (68頁)	<p>婦人相談所は昭和31年売春防止法によって全国に設置された施設である。以来、婦人保護事業の中核として位置付けられている。時代の変化とともに対象は拡大され、女性の相談窓口として様々な相談が持ち込まれている。そこで、全国の婦人相談所の所長を対象に質問紙に</p>

<p>5. 母子の愛着形成に関わる要因の分析</p>	<p>共著</p>	<p>2002年3月</p>	<p>「早期産褥期の母と子の寢床空間環境に関する感性工学的研究」科研費報告書第4章, 14-18P (72頁)</p>	<p>よる調査を行った。婦人相談所の役割意識や課題を明らかにし、女性の性と生殖に関する支援のあり方を考察した。 著者：<u>下見千恵</u></p> <p>フォーカスインタビューの結果から得られた母子の愛着形成に関わる要因の特性について検証した。母児同室/母児異室、新生児のベッドと母親のベッドの配置関係から、母親の新生児に対する愛着度の差を統計学的に明示した。母児のベッド配置という物理的要因および病産院によって異なる母児同室/母児異室のシステムが愛着度に影響する要因として示唆された。 共同研究者：<u>下見千恵</u>、後藤幸子、平岡敦子、片山勢津子、加藤力、國方一憲</p>
<p>6. 母子同室制における新生児ベッドの配置—その現状と課題—</p>	<p>共著</p>	<p>2002年3月</p>	<p>「早期産褥期の母と子の寢床空間環境に関する感性工学的研究」科研費報告書第7章, 30-34P (72頁)</p>	<p>母児同室を行っている病院の看護職者277人を対象に、新生児ベッドの配置について質問紙調査を行った。看護職者の多くが、母児の愛着形成に重要なマザーリングのしやすさを新生児ベッドの配置の理想条件としていた。しかし現実の配置とはギャップがあり、病室空間の限界を大きな要因として見いだした。母児の寢床空間についてその実態から、愛着行動を喚起させるような寢床空間設計について提言した。 共同研究者：<u>下見千恵</u>、後藤幸子、平岡敦子、片山勢津子、加藤力、國方一憲</p>
<p>7. 若者の性と生殖の健康支援づくりに向けたこれからの課題</p>	<p>共著</p>	<p>2002年3月</p>	<p>平成13年度広島県重点研究報告書「性と生殖の健康を支援するためのモデル開発—若者のためのリプロダクティブ・ヘルスサービスの支援づくり—」, 終章, 41-49P (127頁)</p>	<p>思春期に限らず、女性がライフステージにおいて自ら主体的に健康管理が行えるよう、健康教育や健康相談の具体的プランを住民へ浸透させ、参加させるかが課題として考えられた。その一つの戦略としてピアカウンセリングの確立は有用であろうと思われた。一方、恒常的なピアカウンセリングの定着への課題も明らかにし、これからの「まち育て」と健康支援について、考察した。 担当部分：データ分析、データ収集 共同研究者：<u>後藤幸子</u>、<u>下見</u></p>

				千恵
(紀要) 1. 重症心身障害児に対する看護学生の印象の変化とその関連要因についての考察 (第1報) (原著: 査読付)	単著	1997年 3月	広島県立保健福祉短期大学 紀要, 3 (1), 31-38P	看護学生が重症心身障害児をどのように捉えているのかを明らかにし, 小児看護実習における教育方法を考察した. 実習前後で自由記述形式によるアンケートを行い, データをKJ法により分析した. その結果, 実習終了後には障害児に対する印象がpositiveに変化することを確認した. 印象の変化に関連する要因として, 障害児の笑顔などの“反応”等が抽出された. これらの知見をもとに, 小児看護実習における有用な教育方法について示した. 著者: <u>下見千恵</u>
2. 新生児期における母子関係形成を促す看護- 母子相互作用, 乳児の行動特徴および母親の心身状態の関連からの考察- (原著: 査読付)	共著	1999年 9月	看護学統合研究, 1 (1), 50-54P	健康な新生児とその母親68組を対象に, 新生児期における母子相互作用を評価し, 乳児の行動特性や母親の心身の状態の関連性から, 新生児期における母子関係形成を促す看護について検討した. その結果, 新生児の行動特徴は, 母親の疲労度や心理状態等に影響していることが予測された. 乳児の生理的状态が不安定であったり, 分娩経過等で母親の疲労度が高いことが予測される事例では, 早期から母子相互作用や母親の心身への看護の重要性が示唆された. 担当部分: データ分析, データ収集 共同研究者: 竹中和子, <u>下見千恵</u> , 片山美香, 清水凡生 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
3. 産褥3日目の母乳栄養状況と母乳中分泌型 IgA濃度の関連 (査読付)	共著	2009年 3月	人間と科学, 9 (1), 61-66P	産褥3日目における母乳栄養の状況と母乳中のsIgA濃度との関連を明らかにすることを目的とした. 正期産で経膈分娩に至った61名を対象とした. 結果, 新生児の哺乳量のうち母乳の占める割合と母乳中sIgA濃度間に負の相関を認めた ($r = -0.33$,

<p>4. 助産学生の分娩介助技術習得に関する検討—本学助産学専攻科学生の自己評価から— (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2012年 3月</p>	<p>人間と科学, 12 (1), 117-127P</p>	<p>P=.01). 産褥3日目において, 人工乳に対する母乳摂取割合が少ない場合も新生児の健康にとって免疫学的な意義が深い. 母乳分泌量が十分でない母親等に対する母乳哺育支援の重要性が確認された. 共同研究者: <u>下見千恵</u>, 竹中和子, 田丸政男, 田中義人 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p> <p>本研究は, 本学の助産学生の分娩介助技術がどのように習得されているのかについて, 分娩介助技術習得推移, 分娩介助技術の実践と関連性が強いと予測される助産診断や学習方略の関係性の視点から検討した. その結果, 分娩介助技術は事例数に比例して習得されるのではなく, 分娩介助6例目から8例目で自己評価得点が増えることが示された. 担当部分: 総括 (corresponding) 共同研究者: 藤井宏子, 亀石知美, 尼子華子, 滝川節子, 赤松恵美, <u>下見千恵</u> (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>
<p>5. 第1子に小学生がいる保護者の家庭で性教育を行う際の支援に関する検証—父母間での性教育に関する意識の違いについて— (原著: 査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2017年</p>	<p>日本赤十字広島看護大学紀要, 17, 1-7P</p>	<p>第1子が小学生の保護者を対象に, 家庭での性教育の実態・戸惑いの内容, 専門職に求める支援について調査した. 結果から, 性教育のマニュアル作成, 保護者への性教育等の支援が必要であることがわかった. 共同研究者: 亀石知美, <u>下見千恵</u> (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>
<p>6. 広島国際大学における新生児蘇生法普及事業への取り組み (実践報告: 査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>2020年</p>	<p>広島国際大学看護学ジャーナル 17 (1), 27-35P</p>	<p>2007年に一般社団法人日本周産期・新生児医学会が新生児蘇生法普及事業を開始した. 2011年から広島国際大学においても助産学専攻科の学生を対象に新生児蘇生法の講習会を開催した. その後, 広島国際大学の公開講座でも定期的に開催している. 広島国際大学での新生児蘇生法の開催回数と受講者数</p>

				<p>は広島県内で実施されている割合の約 10%を占めており新生児蘇生法普及事業に尽力している. 今後は新生児蘇生法認定更新コースである S コースの定期的な開催や分娩に立ち会う可能性がある医療関係者すべてが新生児蘇生法に精通するため救急隊への普及も検討している.</p> <p>共同研究者: 入江寿美代, <u>下見千恵</u> (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)</p>
(国際会議(査読無)発表) なし				
(国内学会発表) 1. 新生児期における母子相互関係と支援の必要性(査読有り) 2. 授乳時の姿勢における EBN(査読有り)	共著 共著	2000 年 7 月 2000 年 9 月	第 9 回中国四国小児保健学会, 松江 第 1 回日本 QOL 学会, 東京	母子相互作用と乳児の行動特性との関連について, 次のような知見を得た. 新生児の行動特徴は, 母親の疲労度や心理状態や新生児の不安定な身体生理状態が影響していることが予測された. これらの結果から, 母親や新生児がこのような状態の場合, 特に早期から母子相互作用や母親への心身への支援の重要性が示唆された. 担当部分: データ分析, データ収集 共同演者: 竹中和子, <u>下見千恵</u> , 片山美香, 清水凡生 授乳姿勢についての EBN (Evidence-Based Nursing) を動作解析および筋電図検査により明示した. 看護は実践の科学といわれており, 看護学分野における Evidence の明確化は今後より一層重要視されなければならないと考えられる. このような Evidence-Based Nursing の一つ一つの証明の積み重ねが看護学の発展に寄与する

<p>3. 新生児期における母親の養育準備状態—育児経験の有無の影響— (査読有り)</p>	<p>共著</p>	<p>2000年9月</p>	<p>日本教育心理学会第42回総会 ，東京</p>	<p>ものと考える。 担当部分：データ分析 共同演者：後藤幸子，<u>下見千恵</u>，平岡敦子，大川洋子</p> <p>健康な新生児をもつ産褥早期の褥婦（68人）を対象に、母親の心理状態、育児への思い、赤ちゃんに対するイメージ等について調査を行った。その結果、経産婦に比し初産婦の不安感および赤ちゃんに対する回避的イメージが有意に高かった。このことから、特に初産婦に心理的援助の必要性を示唆した。 担当部分：データ分析，データ収集 共同演者：竹中和子，<u>下見千恵</u>，片山美香，清水凡生</p>
<p>4. 新生児期における母親の養育準備状態と支援—母親による自由記述の分析— (査読有り)</p>	<p>共著</p>	<p>2000年12月</p>	<p>第20回日本看護科学学会学術集会 ，東京</p>	<p>入院中の早期産褥期にある褥婦の、「出産体験後の感想（自由記述）」について検討した。データをKJ法を用い、分析（一致度：カッパー係数0.95）した結果、早期産褥期における母親は自己の出産体験について肯定的内容と否定的内容をあわせ持つことがわかった。母親のアンビバレントな思いを受け止め、母親自身が出産体験を振り返り、わが子への愛着を深め、育児レディネスを高められる支援が望まれる。 担当部分：データ分析，データ収集 共同演者：竹中和子，<u>下見千恵</u></p>
<p>5. 新生児用ベッドの作業性からみた実験的検証 (査読有り)</p>	<p>共著</p>	<p>2001年9月</p>	<p>第42回母性衛生学会総会 ，大阪</p>	<p>病産院で使用されている新生児用ベッドについて、空間領域および高さについての作業面から見直し、その課題を明らかにすることを目的とした。同意の得られた学生44名を対象に、実験（ベッド内でのモデル人形の衣服の着脱作業）を行った。その結果、“ベッドの高さに関するニーズ”“ベッドの空間領域に関するニーズ”“腰痛などの身体的負担”等のコアカテゴリーが抽出した。 共同演者：<u>下見千恵</u>，後藤幸子，平岡敦子，住吉史子，蔵本美代子</p>
<p>6. プロトコルによる母子関係の把握 病産院における母子の寝床空間関す</p>	<p>共著</p>	<p>2001年10月</p>	<p>日本インテリア学会第13回大会 ，新潟</p>	<p>母児同室制をとっている病産院で褥婦を対象に入院生活についてのフォーカスイ</p>

<p>る研究 その1</p>				<p>インタビューを行った。データを物理的環境，社会的環境，身体状況，精神状態等にカテゴライズし，分析した。その結果，授乳や風呂，トイレといった日常生活動作の行いやすさが入院生活全体に関する印象に大きな要因として関係していた。特に子どもへの愛着度は授乳がスムーズであるか否かが大きく関わっていた。 担当部分：データ分析，データ収集 共同演者：片山勢津子，<u>下見千恵</u>，平岡敦子，加藤力，後藤幸子</p>
<p>7. 母子の愛着形成に関わる要因の分析 病産院における母子の寢床空間に関する研究 その2</p>	<p>共著</p>	<p>2001年10月</p>	<p>日本インテリア学会第13回大会，新潟</p>	<p>母子の寢床空間とわが子に対する愛着度の関連について調査した。その結果，寢床環境において“わが子に触れやすかった”ベッド配置であった母親の愛着度は高い傾向にあった。愛着形成には，“接触”が重要であることが示唆されている。特に早期産褥期における母と子のベッドの配置の重要性を提言した。 共同演者：<u>下見千恵</u>，平岡敦子，片山勢津子，加藤力，後藤幸子</p>
<p>8. 母子間距離とその心理に関する考察 病産院における母子の寢床空間に関する研究 その3</p>	<p>共著</p>	<p>2001年10月</p>	<p>日本インテリア学会第13回大会，新潟</p>	<p>早期産褥期の母子の寢床空間について，母子相互作用の観点から，基準となる空間設計のための実験的基礎調査を行った。赤ちゃんとの適正距離について，褥婦の要求距離を，コントロール群を女子学生とした実験により抽出した。 母親の要求した適正距離は，女子学生より大きかった。母親独自の子どもへの距離感の存在を考察した。 担当部分：データ分析，データ収集 共同演者：平岡敦子，<u>下見千恵</u>，片山勢津子，加藤力，後藤幸子</p>
<p>9. 1歳児をもつ母親の育児観に影響する要因 (査読有り)</p>	<p>共著</p>	<p>2001年12月</p>	<p>第21回日本看護科学学会学術集会，神戸</p>	<p>1歳児をもつ母親の育児観を子どもの行動特徴と父親の育児観から分析した。5段階尺度で回答を求めるもので得点化し，因子分析等を行った。子どもの行動特徴だけでなく，父親の育児支援状況や養育姿勢が母親の育児の受け止めに影響していたこと</p>

<p>10. ピアカウンセリングによる健康講座の実践的検証 (査読有り)</p>	<p>共著</p>	<p>2002年8月</p>	<p>第21回日本思春期学会, 金沢</p>	<p>から, 新たな育児支援の方策を提案した. 担当部分: データ分析, データ収集 共同演者: 竹中和子, <u>下見千恵</u></p> <p>ピアカウンセラーとして看護学生を育成し, 若者に対する性に関する健康講座をピアカウンセリングにより行った. このピアカウンセラー育成プログラムを評価した. ビデオ収録視聴による客観的評価は, 学生のピアカウンセリング技術の向上に効果的な方法であることがわかった. 一方, ピアカウンセリングを定着させていくためには, 健康講座の企画方法や受講者の招集, また大学教育の中での位置付け等の課題も明確になった. 担当部分: データ分析, データ収集 共同演者: 蔵本美代子, 平岡敦子, <u>下見千恵</u>, 矢野美紀, 後藤幸子, 住吉史子</p>
<p>11. 新生児用ベッド作業性についての基礎的調査 (査読有り)</p>	<p>共著</p>	<p>2002年9月</p>	<p>第43回日本母性衛生学会, 旭川</p>	<p>既製新生児用ベッド(コット)の作業性について, 看護学生を対象に行った実験結果から作業のしにくさが示された. 本研究では看護職者を対象にした調査から, コットの作業性について新たな知見を得た. 「身長」と「コットの高さ」間に相関関係を確認した. 以上のことから, 褥婦にも看護者にも負担の少ない新生児ベッドのあり方を検討する基礎的資料を提示した. 共同演者: <u>下見千恵</u>, 後藤幸子, 平岡敦子, 片山勢津子, 矢野美紀, 蔵本美代子</p>
<p>12. 地域における「若者と性の健康」啓発のための戦略過程と課題(第1報) —講演開催の企画過程と実践活動の一考察— (査読有り)</p>	<p>共著</p>	<p>2002年9月</p>	<p>第43回日本母性衛生学会, 旭川</p>	<p>若者のためのリプロダクティブ・ヘルスサービスのまち育て支援づくりの一つとして, 広島県重点研究メンバーが企画した「若者と性の健康: ちゃんと考えよう十代の性」をテーマに講演を開催した. その企画と実践活動を通しての評価を行い, 地域における啓発のための戦略過程とこれからの課題について報告した. 担当部分: データ分析, データ収集 共同演者: 後藤幸子, 蔵本美</p>

<p>13. 「若者と性の健康」その実践と課題（第2報）アンケート調査結果から見る講演会企画の課題（査読有り）</p>	<p>共著</p>	<p>2002年9月</p>	<p>第43回日本母性衛生学会，旭川</p>	<p>代子，平岡敦子，<u>下見千恵</u>，住吉史子，矢野美紀</p> <p>第1報で述べた「若者の性の健康」招待講演において，受講者の162人を対象に，講演会の企画・内容等について意識調査を行った．若者の参加意識の向上を図るためのプロモーション方法の検討や，思春期の子どもを支える人（保護者・教員・看護職）への支援の必要性等の課題を提示した． 担当部分：データ分析，データ収集 共同演者：平岡敦子，後藤幸子，蔵本美代子，<u>下見千恵</u>，矢野美紀，住吉史子</p>
<p>14. 母子の寢床空間に対する褥婦の評価特性 病産院における母子の寢床空間に関する研究4，</p>	<p>共著</p>	<p>2002年10月</p>	<p>日本インテリア学会第14回大会，東京</p>	<p>母子の「接触」は愛着形成に重要であることから，早期産褥期における母子の寢床空間について，感性工学的視点から「接触」のしやすい空間設計を検討した．本研究では，母児同室を前提とした寢床空間の母子の位置関係に関する評価実験を行い，褥婦の寢床空間に対する要求条件を明らかにし，かつ評価特性を抽出した． 担当部分：データ分析，データ収集 共同演者：片山勢津子，<u>下見千恵</u>，平岡敦子，加藤力，後藤幸子</p>
<p>15. 母親の育児への受け止めに影響する要因—生後1年間の縦断的分析から—（査読有り）</p>	<p>共著</p>	<p>2002年12月</p>	<p>第22回看護科学学会，東京</p>	<p>褥婦が入院中，乳児期前期および1歳時の3期にわたる調査により，育児受け止めと母親の心身の状態との関連を検討した．出産時の育児の受け止めは母親の心身の状態に影響を受けていたが，その後は他の要因が関連していた．また出産後の入院中の不安が高い母親はいずれの時期も不安が高いま経過していた．不安感の強い母親は持続して不安を感じやすいことが考えられ，継続した援助の必要性が示唆された． 担当部分：データ分析，データ収集 共同演者：竹中和子，<u>下見千恵</u></p>
<p>16. 分娩期における唾液中のsIgAの変化に関する研究—sIgA変化要因検討の試み—</p>	<p>共著</p>	<p>2003年11月</p>	<p>第50回日本小児保健学会，鹿児島</p>	<p>分娩第I期における産婦を対象に，唾液中のsIgA濃度の変化を調査した．分娩経過におけるsIgA濃度の変化傾</p>

(査読有り)				向を示し、この変化に関連する要因を人的環境におけるストレスから検討した。妊娠期の状態、産褥期および母乳に含まれる sIgA 値についても合わせて検討していく予定である。 共同演者： <u>下見千恵</u> ，田丸政男，田中義人
17. 母乳中の分泌型 IgA と妊娠期における唾液中分泌型 IgA の関連 (査読有り)	共著	2004年12月	第24回日本看護科学学会，東京	妊娠経過中合併症がなく、経膈分娩が予測された妊婦34人(初産婦16人，経産婦18人)を対象に、妊娠末期に唾液採取，産褥3日以内に母乳採取を行った。母乳中の sIgA と妊娠末期の唾液中 sIgA は正の相関を認めた ($r=.42$ ， $p=.01$)。唾液中の sIgA はストレスと関連があることから、妊娠期における心身の状態が母乳中の sIgA に影響を及ぼす可能性が考えられた。 共同演者： <u>下見千恵</u> ，竹中和子
18. 1歳児をもつ父親の育児への受け止め—母親との比較から— (査読有り)	共著	2004年12月	第24回日本看護科学学会，東京	1歳児をもつ特に父親の育児への受け止めに焦点をあて、母親のそれと比較検討した。育児を「楽しい」かつ「大変」と答えた父親が半数以上みられた。育児を「楽しい」と受け止めている度合いは、父親と母親とで必ずしも一致していなかった。同様に、育児を「大変だ」という受け止めも、両者で有意な相関はみられなかった。育児支援者としての父親への援助が重要となるが、積極的であるというだけでなく、家族全体の調整や個別的な支持が必要になると考える。 担当部分：データ分析，データ収集 共同演者：竹中和子， <u>下見千恵</u>
19. 痛み刺激による唾液中分泌型 IgA の変化	共著	2005年3月	コ・メディカル形態機能学研究会 第3回学術集会，金沢	健康な成人を対象に痛みによる唾液中 sIgA の変化を分析した。その結果痛みにより sIgA は低下した。また、痛みをより強く感じた者にその傾向が顕著であった。 担当部分：実験的解析，総括 共同演者：遠山マリナ， <u>下見千恵</u> ，田丸政男
20. 分泌型 IgA を指標とした分娩期における看護	単著	2005年10月	平成15年度学内プロジェクト研究・県立大学重点研	分娩進行中の産婦を対象にストレスと看護ケアについ

と産婦のストレスに関する研究			究成果発表会 ， 広島	て検討した. 分娩期には sIgA が徐々に上昇し，一部の時間帯で，看護職者のキャリアと正の相関が得られた. 著者： <u>下見千恵</u>
21. 分娩期における唾液中のストレス指標物質の変動について	共著	2005 年 5 月	第 23 回日本生理心理学会大会 ， 愛知	分娩期の産婦のストレスについて，その指標物質とされる sIgA およびクロモグラニン A (CgA) の変動について，唾液を用いて検討した. 検査には同意が得られた産婦 5 人を対象とし，唾液採取は分娩第 1 期の入院直後から分娩後 2 時間まで 2 時間毎に採取した. いずれの物質も分娩 6 時間前から徐々に上昇し，CgA 濃度は分娩 2 時間後において妊娠期の値まで復帰した. しかし sIgA 濃度は復帰傾向を示したが，妊娠末期の値よりなお高い値を示した. 担当部分：実験的解析，データ収集 共同演者：田丸政男， <u>下見千恵</u> ，平田ゆかり，清水遵
22. 産褥早期における母乳哺育支援—産褥 3 日目における母乳中の分泌型 IgA 濃度との関連から— (査読有り)	共著	2006 年 11 月	第 47 回母性衛生学会 ， 名古屋	本研究では，新生児の健康にとって重要な sIgA と産褥早期における母乳栄養状況との関連について明らかにすることを目的とし，母乳哺育の支援について考察した. 母乳中の sIgA 濃度と母乳の割合には負の相関 ($r = -0.33$, $P = .01$) が認められ，母乳の割合が少ないほど母乳中の sIgA 濃度は高かった. 母乳分泌が少ない場合であっても，効率的に免疫を新生児に与えていることが示唆された. 共同演者： <u>下見千恵</u> ，竹中和子
23. 子どもに対する血圧測定の前準備のプレパレーションの効果に関する検討～VAS と唾液中 s IgA 値を指標として～ (査読有り)	共著	2006 年 12 月	第 26 回日本看護科学学会 ， 神戸	健康な小児 3 名に対し血圧測定の前準備のプレパレーションを実施し，その前後で VAS (Visual Analogue Scale) と s IgA (分泌型免疫グロブリン A) を測定した. 各測定値とプレパレーションの具体的な実施方法との関連性を考察した. 担当部分：実験的解析，データ収集 共同演者：松森直美， <u>下見千恵</u>
24. 妊娠期および産褥期	共著	2007 年 12 月	第 27 回日本看護科学学会	本研究では，妊娠期および産

<p>における唾液中 sIgA 濃度の基礎的調査 (査読有り)</p>			<p>学術集会 ，東京</p>	<p>褥期における唾液中の sIgA 濃度を縦断的に測定し，基礎的データを得ることとした．対象は健康な妊婦 80 名で，正産婦で経膈分娩に至った．妊娠末期，分娩後 2 時間，産褥 3 日目の 3 回唾液採取を行った．妊娠期から分娩後 2 時間では変化がなかったが，妊娠期に比し，産褥 3 日目には 2 倍以上に上昇した (p=.018)．周産期は免疫学的にも特異な状態にあることから，他の変動要因を含め，今後検討を重ねる必要がある． 共同演者：下見千恵，竹中和子</p>
<p>25. 子宮復古に関する基礎的研究—帝王切開後の子宮底長の実測値を用いて— (査読有り)</p>	<p>共著</p>	<p>2008 年 3 月</p>	<p>第 22 回日本助産学会学術集会 ，神戸</p>	<p>帝王切開分娩後の子宮底長の経日的変化について基礎的データを得てその傾向を探った．褥婦 24 名を対象に，帝王切開分娩後から退院まで，毎日子宮底長を測定した．同時に悪露の色調について調査した．帝王切開後の子宮復古は，経膈分娩に比し遅れ，その変化のパターンは，1 日ごとの規則的な変化ではなく，産後 2 日目と 5 日目に下降するという特徴が見られた．また，悪露の変化は経膈分娩に比べて遅れる傾向があった． 担当部分：データ分析，総括 共同演者：藤井宏子，下見千恵，石井智子，住吉史子，佐々木貴美江</p>
<p>26. 帝王切開分娩における子宮復古現象に関する指標づくり—評価基準一般化の試み—</p>	<p>共著</p>	<p>2008 年 9 月</p>	<p>広島県重点研究発表会 ，広島</p>	<p>子宮底長は，産褥期の子宮復古を査定する場合の重要な指標の一つであり，基準作りの必要性や意義は大きい．本研究では，帝王切開分娩後の子宮底長の経日的変化について基礎的データを得ることを目的とし，さらに変化の特徴について考察した．帝王切開した褥婦 36 名を対象に，産後 0 日目から退院まで子宮底長の計測調査した．子宮底長は産褥日数によって幅があり，特に産褥 0 日目から 2 日目までの極めて産褥早期において大きい傾向があった．今後，特に産褥早期における個体差について，影響因子を含め分析する必要がある． 共同演者：下見千恵，藤井宏子，佐々木貴美江，住吉史子，</p>

<p>27. 現代の助産師の専門職性と助産師教育に関する検討</p>	<p>共著</p>	<p>2008年9月</p>	<p>広島県重点研究発表会，広島</p>	<p>石井智子</p> <p>質や量ともに充実した助産師教育を展開可能にすることを前提とした助産師の専門職性の検討を視野に，クライアントからみた助産師の需要の現状について調査した．2歳未満の子どもをもつ母親719名に対し，Web調査を行った．対象者の8割以上が出産等で助産師からのケアの提供を受けており，医師や看護師の増加に関わらず助産師にしかできないケアがあると認識していることが示された．また，医師や看護師の増加に関係なく助産師に対する需要があることも示された． 担当部分：データ分析，データ収集 共同演者：藤井宏子，<u>下見千恵</u></p>
<p>28. 子どもに対する血圧測定の前準備のプレパレーションの効果に関する検討Ⅱ～VASと唾液中sIgA値を指標として～ (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2008年9月</p>	<p>第55回日本小児保健学会，札幌</p>	<p>子どもに対する検査・処置時のプレパレーションについて客観的な指標を用いた効果を検討するため，実施前後でVAS(Visual Analogue Scale)と唾液中sIgAを測定し，実施群と非実施群の値を比較した． 小児10名にパペットを用いた血圧測定の前準備のプレパレーションを積極的に実施した群と非実施群とに分け，VAS得点と唾液中sIgA値を測定した． 実施群では，VAS値が下がったのは2名，変化がなかったのは2名，直後に下がり10分後に元に戻ったのが1名であった．非実施群では，VAS値は変化なくsIgA値の変化に統一性が全くなかった．プレパレーションの非実施も一つの刺激として考えると，その刺激を子どもがどのようにとらえたかによってsIgA値が変化するのではないかと示唆された． 担当部分：データ分析，データ収集 松森直美，<u>下見千恵</u></p>
<p>29. 悪露の色調変化に関する調査 (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2008年11月</p>	<p>第49回母性衛生学会，千葉</p>	<p>悪露の色は産褥の子宮復古状態を査定する一つの指標である．帝王切開分娩後の悪露の色調変化については明確でない．そこで悪露の色調</p>

<p>30. 20代の看護職の離職理由に関する検討 (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2008年12月</p>	<p>第28回日本看護科学学会，福岡</p>	<p>変化について，帝王切開分娩（以下CS）と経膈分娩（以下VD）の比較検討をした．褥婦80名（CS：34人，VD：46人）を対象に悪露の色調について質問票を用いて調査した．悪露の色は赤色，赤褐色，褐色の3種類とし，カラー印刷したものを色見本として質問票に提示し，チェックしてもらった．悪露の色調の変化にはCochranのQ検定およびMcNemar検定を用いた．VD事例の悪露の色調は産褥3日目から変化した（$p < .05$）のに対し，CS事例では産褥6日目（$p < .01$）からであった．分娩形態によって悪露の色調の変化は異なることが示唆された． 共同演者：<u>下見千恵</u>，藤井宏子，住吉史子，前田純子，佐々木貴美江</p> <p>【目的】近年，新卒看護職の早期離職が問題視されている．看護職の早期離職を背景に20代で離職を経験したことのある看護職を対象としたWeb調査から，彼らの離職理由と今後の看護職継続意思について把握することを目的とした検討した．分析対象は51名で，離職理由のうち最も多かったのは，「労働条件が悪かった」「慢性的な精神疲労」であり，「慢性的な肉体疲労」「職場の人間関係」がこれに続き，臨地と教育の実践能力の乖離を離職理由に挙げるものは必ずしも多くなかった．看護職継続意思の有無については，継続意思なし群は51名中9名（17.6%）であった．彼らの離職理由は心身ともに疲弊した状態にあったこと，組織を離職することがすなわち看護職としての離職を意味しないことが推測された． 担当部分：データ分析，データ収集 共同演者：藤井宏子，<u>下見千恵</u>，戸梶亜紀彦</p>
<p>31. 帝王切開分娩後における子宮復古評価基準の作成</p>	<p>共著</p>	<p>2009年8月</p>	<p>平成20年度重点研究事業成果発表会，広島</p>	<p>帝王切開分娩後の子宮底長の経日的変化および悪露の色調変化を明らかにし，その変化の特徴について考察した． 分析対象者を正期産，単胎と</p>

<p>32. 「できちゃった結婚」をした学生の母になる気持ちに関する調査—出産の決意から出産後までの縦断的調査— (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2009年9月</p>	<p>第50回日本母性衛生学会 学術集会 ，横浜</p>	<p>し、欠損値のない74名とした。子宮底長は2日ごとに明確な違いが生じると考えられ、経膈分娩における子宮底長の変化のパターンとは異なることが示唆された。悪露色調は産褥5日目から有意に変化した ($p < .05$) が、38%は赤色悪露であり、褐色のものは11%程度であった。悪露の色調の変化においても経膈分娩に比べて遅れる傾向があり、産褥5日目以降に赤色から赤褐色あるいは褐色に色調が変化すると考えられた。 共同演者：<u>下見千恵</u>，藤井宏子，前田純子，住吉史子，佐々木貴美江</p> <p>若年のできちゃった結婚においての妊娠継続の決意から出産後までの気持ちを明らかにすることを目的とした。学生であるときに妊娠が判明し、出産を決意した女性6名にインタビューを行い、KJ法を参考に分析した。本研究結果では妊娠継続の意思決定時は揺るぎない意思で決意したにもかかわらず、対象者全員に妊娠中の児に対する気持ちの変化や、母親としての実感が見られなかった。しかし、出産後には全員が母親としての実感をもち、児に対する愛情が見られていた。妊娠期の愛情が低いと思われても、出産後に愛情が上昇することも期待できると考えられることから、他の母親と同様に出産後の育児がスムーズに開始できるような関わりが必要であると考えられる。 担当部分：データ分析 共同演者：石田加奈子，<u>下見千恵</u></p>
<p>33. 対象者からみた助産師の需要に関する調査 (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2009年9月</p>	<p>第50回日本母性衛生学会 学術集会 ，横浜</p>	<p>助産師のケアの対象者から、助産師が他職種と区別されるのかについて示唆を得ることを目的とした。調査はWebを用いて、経膈分娩にて3年以内に出産した女性を対象とした。719名から協力が得られ、多くの対象者が助産師のケアを受け、助産師のケアの必要性を認識している結果が示された。また、他</p>

<p>34. 帝王切開分娩後の子宮底長に影響する因子の考察 (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2010年3月</p>	<p>第24回日本助産学会学術集会 ，筑波</p>	<p>職種の増員があった場合にも、助産師は必要であるという回答が多く、助産師にしかできないケアがあるという認識をもっていることもわかった。 担当部分：データ分析 共同演者：藤井宏子，<u>下見千恵</u></p> <p>産褥期の子宮復古に影響する因子は、年齢、出産歴、新生児体重、授乳、出血量などが考えられているが、帝王切開分娩の場合、どのように影響を与えているのか、検討した。 帝王切開した褥婦74名（正期産、単胎）を対象に、産褥1日目から7日目まで、子宮底長を測定した。重回帰分析の結果、産褥1日目では、年齢（標準化係数 $\beta = .23$, $p < .05$）、新生児の体重（$\beta = .34$, $p < .01$）、初回授乳の開始時期（$\beta = -.46$, $p < .01$）、一日の授乳回数（$\beta = -.31$, $p < .05$）が影響していた。特に授乳に関する2変数のβは$-.40 \sim -.74$と大きかった。分娩時出血量は関連を認めなかった。 共同演者：<u>下見千恵</u>，藤井宏子，石井智子，住吉史子，佐々木貴美江</p>
<p>35. 分娩第1期における助産師の内診時期の判断に関する調査 (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2010年11月</p>	<p>第51回日本母性衛生学会学術集会 ，金沢</p>	<p>分娩時の内診は、適時行うことが望ましいとされているが、「適時」を明確に示した文献は皆無に等しい。そこで、現場の助産師の内診実施状況について調査を行った。経膈分娩に至った、初産婦・経産婦各30名のパルトグラムから、分娩第1期の内診時期と決定要因、関わった助産師の経験年数に関する情報を得た。内診決定要因のうち、頻度の高かった項目は、「表情、状況」「努責」「痛み」等であった。また、経験年数と内診決定要因の関係は、若年層ほど「表情、状況」によって内診を決定していることが示唆された ($F=7.73$, $p < .05$). 担当部分：調査票作成，データ分析 共同演者：藤井宏子，<u>下見千恵</u>，北村久美子，宇野久美，元山諭美</p>

36. 帝王切開後の子宮底長—双胎事例の傾向— (査読あり)	共著	2010年12月	第30回日本看護科学学会 学術集会 ，札幌	<p>生殖補助医療の発展を背景に、増加している双胎妊娠では帝王切開率は高くなることが推測されるが、帝王切開後の子宮底長の変化については明確でない。そこで、変化の傾向を明らかにするために、双胎事例における産褥の子宮底長の変化について単胎事例との比較検討を行った。</p> <p>単胎事例（S事例）では、2日ごとの下降パターンを示した（ANOVA, $p < .001$, Tamhane's T2, $p < .01$）。しかし、双胎事例（T事例）では産褥0日目から4日目まで統計学的な有意差は認められず、産褥5日目で初めて有意に下降した（ANOVA, $p < .001$, Tamhane's T2, $p < .05$）。</p> <p>T事例ではS事例と下降パターンが異なる上、S事例に比し子宮底長は高く、子宮復古は遅いことが示唆された。</p> <p>共同演者：<u>下見千恵</u>，藤井宏子，住吉文子</p>
37. 助産師養成課程に在籍する学生の学習プロセスと到達度に関する調査 (査読あり)	共著	2011年12月	第31回日本看護科学学会 学術集会 ，高知	<p>助産学を専攻する学生を対象に、彼らの学習プロセスと到達度に関する調査を行った。学士課程修了後に1年間の助産師養成課程を修了した者5名を対象に修了時の到達度の自己評価と学習プロセスについて半構造化面接を行った。単に学習計画があるか否かを問うだけでは不十分であり、学習プロセスの管理手法そのものが到達度を分岐させると推測された。プロセス管理の手法そのものを指導する必要もあると考えられた。</p> <p>担当部分：データ分析 共同演者：藤井宏子，<u>下見千恵</u></p>
38. 中学1年生の性教育に関する調査 (査読あり)	共著	2012年5月	第26回日本助産学会学術集会 ，札幌	<p>性・生殖を理解できる発達段階にある小学生から行う性教育の充実が求められている。入学して間もない中学1年生が、どれくらい性教育を受けたと認識しているかを調査票を用いて調査した。中学校の1年生102名から回答があり、小学校で性教育を受けたことがあると回答した生徒は24.5%だった。一方で約1割の生徒は、小学校の</p>

<p>39. 月経教育に関する一考察—女子中学生の月経に関する知識から— (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2012年11月</p>	<p>第53回母性衛生学会，福岡</p>	<p>学習要領の内容以外の中絶やSTDの知識があることがわかった。 担当部分：データ分析 共同演者：亀石知美，<u>下見千恵</u></p> <p>女子中学生（164名）を対象に月経に関する知識を調査し、月経教育について考察した。「月経周期から排卵日が予測できることを知っている」以外は、学年によって統計学的有意差はなかった。このことから、必ずしも女子中学生は学年を経るごとに月経に関する知識を増やしていないことが推測された。中学校においても継続した健康教育としての月経教育が必要であると考えられた。 担当部分：データ分析 共同演者：亀石知美，<u>下見千恵</u></p>
<p>40. 祖父母を対象とした孫育て教室での支援内容へのニーズ—親世代と祖父母世代— (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2013年5月</p>	<p>第27回日本助産学会学術集会，金沢</p>	<p>孫の育児にあたる祖父母を対象とした育児講座（以下孫育て教室）が開かれるようになってきている。一方、孫育て教室のプログラムについて、参加者側のニーズに関するデータは少ない。本研究では、孫育て教室について、親世代と祖父母世代のニーズ調査を行った。7割以上が「孫育て教室」への参加を希望していた。教室で聞きたい項目は、親世代では妊娠中や産後の過ごし方など、母親自身に関する内容、祖父母世代では離乳・おむつ交換・衣服の着脱と育児技術が多かった。 共同演者：<u>下見千恵</u>，竹中和子，尼子華子</p>
<p>41. 助産学生における自己効力感と学習方略との関連 (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2014年3月</p>	<p>第28回日本助産学会学術集会，長崎</p>	<p>助産学生の自己効力感及び学習方略の特徴を明らかにすることを目的とした。助産専攻科の学生12名を対象に、2013年6月、分娩介助に対する自己効力感等の質問紙調査を行った。その結果、一般的自己効力感と分娩介助に対する自己効力感との間には高い正相関が認められた ($r=.79, p<.01$)。また、一般的自己効力感と分娩介助に対する自己効力感は、自己調整的学習方略との間に高い正相関が認められた ($r=.82; r=.83, p<.01$)。 担当部分：データ分析，総括</p>

<p>42. 乳児音声シグナルに対する反応—実験場面における養育経験者と養育未経験者の心拍数の検討— (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2014年6月</p>	<p>日本赤ちゃん学会第14回 学術集会 ， 神奈川</p>	<p>共同演者：小山里織，藤井宏子，亀石知美，<u>下見千恵</u></p> <p>乳児と養育者の情緒的相互作用過程の支援につなげるために，乳児音声刺激に対する乳児養育経験者と親準備期にある養育未経験者の身体生理的反応（心拍数<以下HR>）について検討した．乳児シグナルに対する反応（HR）に，乳児養育経験者と未経験者で各1名の結果であったが違いがみられた．特に音声シグナルのみの場合乳児の状況情報が少ないことから，どう受け止めるかということにより養育経験が影響していると考えられた． 担当部分：データ分析 共同演者：竹中和子，<u>下見千恵</u></p>
<p>43. 母性看護実習における学生の看護技術経験と自己評価—学生の性別による比較検討— (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2014年9月</p>	<p>第55回日本母性衛生学会 学術集会 ， 千葉</p>	<p>本学の男子看護学生の割合は約2割と多い(2011年全国平均10.3%)．男子学生の実習状況に影響を及ぼす母性看護実習での技術経験と学生の自己評価について検討した．対象は同意の得られた学生114名(女79.8%，男20.2%)．技術経験の有無では全51項目のうち，17項目で女子学生の経験有が多かった(p<.05)．技術項目の経験の有無によって自己評価に差(p<.05)が認められた．沐浴など男子でも実施しやすい技術項目が自己評価に影響していたことから，男子学生が実施しやすい技術項目も積極的に調整し実施させることも有意義であると考えられた． 共同演者：<u>下見千恵</u>，羽山美和，友安由貴子，室津史子</p>
<p>44. 「母性看護学実習における学びの検討 - 実習前後に実施した試験結果の比較 -」 (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2014年9月</p>	<p>第55回日本母性衛生学会 学術集会 ， 千葉</p>	<p>母性看護学実習を終了した学生116名のうち，同意の得られた110名(女子88名，男子22名)を対象とした．実習前後に看護師国家試験の出題形式を参考にして作成した25問(40点)の試験問題を実施した．試験得点について実習前後，性別および実習グループ人数別による比較を行った．実習前22.3±5.1点，実習後24.8±4.9点であった．男子学生は女子学生よりも実習前の得点は低い(p<.05)が，実習後の</p>

<p>45. 「乳児シグナルに対する養育経験者と養育未経験者の反応—実験場面における心拍数の検討」</p>	<p>共著</p>	<p>2015年3月</p>	<p>日本発達心理学会 第26回大会 ，東京</p>	<p>平均得点には男女の差はみられなかった。また、1グループ5名以上で実習した学生よりも3名以下で行った学生の方が実習前後ともに平均得点が高かった ($p < .05$)。 担当部分：データ分析，総括 共同演者：室津史子，友安由貴子，羽山美和，<u>下見千恵</u></p> <p>乳児のシグナルが養育者の感情状態に与える影響について解明するため，母親との自然なやり取りを実験場面で再現し，乳児のシグナルに対する乳児養育経験者と親準備期にある養育未経験者の反応(心拍数)を検討した。 担当部分：データ収集，データ分析 共同演者：竹中和子，<u>下見千恵</u></p>
<p>46. 「生殖医療に関する学生の学びの考察—看護倫理の授業を通して—」 (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2015年3月</p>	<p>第29回日本助産学会学術集会 ，東京</p>	<p>「救世主兄弟」について取り上げた看護倫理の授業後，看護師を志す18歳の学生がどのような考えを持ったのか分析を行った。研究協力の得られた112名の学びの記述の中から救世主兄弟についての意見をKJ法により分析した。救世主兄弟の賛否は反対が76名(67.9%)と最も多かった。また賛否に関わらず親と救世主兄弟の両者の意見が出ていた。 担当部分：データ収集および分析，総括 共同演者：友安由貴子，羽山美和，室津史子，<u>下見千恵</u></p>
<p>47. 「第1子が小学生の子どもをもつ父親の家庭での性教育の実態調査」 (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2015年3月</p>	<p>第29回日本助産学会学術集会 ，東京</p>	<p>父親に対する性教育に関する調査は少なく，小学生の父親が性教育についてどう考えているかなどは明らかになっていない。本研究では第1子が小学生の父親42名を対象に性教育に関する意識について質問票調査した。父親は，家庭での性教育を必要だと考えていたが実施しておらず，約半数が戸惑いや困難さを感じていることが分かった。そして，父親は家庭での主な性教育の実施者ではなかったが，性教育の必要性を感じ，専門職に支援を求めていることが分かった。 担当部分：データ収集および分析，総括 共同演者：亀石 知美，<u>下見</u></p>

<p>48. 「乳児養育疑似体験モデルに関する親準備教育効果の検討 予備実験結果の分析から」 (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2015年6月</p>	<p>日本赤ちゃん学会第15回 学術集会 ，香川</p>	<p><u>千恵</u> 乳児養育疑似体験モデル構築を目指した予備実験結果から、親準備教育効果を検討した。 大学生を対象にコントロール刺激および乳児シグナル刺激で構成した実験プロトコルにしたがって、心拍数を計測。 ベビー人形抱っこでの触覚、視覚体験が結果に影響していた可能性が見出された。 担当部分：データ収集 共同演者：竹中和子，<u>下見千恵</u></p>
<p>49. 母性看護実習における異なる実習形態による学生の実習評価に関する検討 (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2015年12月</p>	<p>第35回日本看護科学学会 学術集会 ，広島</p>	<p>近年、看護師養成大学数は増加し続けている。少子化も重なり、特に母性看護実習における実習施設の確保は容易ではない。実習施設確保の厳しい状況から、臨地は病棟と地域で構成されることもある。本研究では、病棟実習期間による学生の実習評価を比較検討した。受け持ち対象の特徴は異なっていたが、病棟実習期間によって実習成績等学習に差はなかった。短期間でも母性看護の対象に触れさせ、看護を考えさせることは、看護職者となる学生にとって重要である。 共同演者：<u>下見千恵</u>，羽山美和，友安由貴子，室津史子</p>
<p>50. 分娩期実習における看護学生の学びの検討 (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2015年12月</p>	<p>第35回日本看護科学学会 学術集会 ，広島</p>	<p>分娩期の実習を経験する機会を得た学生の体験や学びをレポートから分析し、指導方法を考察した。経膈分娩の見学では、産婦と共有する空間の中で一体感が生まれ、産婦の変化を通して援助者としての自己のあり方を問い、産むことの感動を味わう。帝王切開による分娩では、産婦の表情の変化を捉え難く、産声をあげて生きようとする子どもに着目しがちであった。感じ学んだことを表出する場の提供と、実施したケアを評価しケアの意味づけを行う時間を充実させる必要性が示唆された。 担当部分：データ分析，総括 共同演者：室津史子，友安由貴子，羽山美和，<u>下見千恵</u></p>
<p>51. 乳児養育経験者および未経験者の乳児シグナ</p>	<p>共著</p>	<p>2016年4月</p>	<p>日本発達心理学会第27回 大会</p>	<p>乳児養育経験者および未経験者における、母親視線の自</p>

<p>ル認知と感情体験—母親視線による自然場面映像視聴直後の自由記述の検討— (査読あり)</p>			<p>，札幌</p>	<p>然場面映像視聴による乳児シグナル認知と感情体験について検討した。映像による疑似体験ではあったが、乳児養育経験者は乳児との相互作用経験から、乳児の身体的、心理的状态を予測するとともに、自身の感情体験を投影してとらえていると考えられる。養育準備期にある乳児養育未経験者が、前言語期にある乳児の身体的、心理的状态を予測し関わる事ができれば、未体験の事象への戸惑いが少なく、より豊かな情緒的相互作用を展開することにつながるのではないかと考えた。 共同演者：竹中和子，<u>下見千恵</u></p>
<p>52. 乳児養育の視聴覚疑似体験による親準備教育効果の可能性—大学生における乳児シグナル視聴実験前後の対児感情評定尺度得点の変化 から — (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2016年5月</p>	<p>日本赤ちゃん学会第16回学術集会 ，京都</p>	<p>自然場面における乳児音声および映像視聴における乳児養育疑似体験の親準備教育効果の可能性について、視聴実験前後の対児感情評定尺度(花沢, 1992)得点の変化から検討する。実験後の接近得点と回避の両方が高くなっていた。本実験においては、乳児シグナルを体験直後に記述することで、視聴による体験のみならず、場面を再構成する機会となったのではないかと考える。親準備教育につながる可能性を見出せたと考える。 共同演者：竹中和子，<u>下見千恵</u></p>
<p>53. 双胎児の父親の育児参加状況に関する文献検討 (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2016年10月</p>	<p>第57回日本母性衛生学会学術集会 ，東京</p>	<p>双胎児の父親の育児参加の実態について、文献から単胎児の父親の育児参加状況と比較検討した。外出など一部の育児行為で双胎児の父親の方が関わりが多かった。パートナーへの思いでは、双胎児の父親の方がパートナーの育児負担に対しての思いはより強く、かつパートナーの心身両面に着目していた。特に双胎児の父親は、母子へのリスクを医師から説明されていることから、双胎妊娠・出産リスクの認識と不安があり、妊娠中もストレスも感じていた。 共同演者：伊藤亜紀，<u>下見千恵</u></p>
<p>54. 母性看護学実習にお</p>	<p>共著</p>	<p>2016年10月</p>	<p>第57回日本母性衛生学会学術集会</p>	<p>母性看護学実習における病棟実習期間や実習グループ</p>

<p>ける学生の自己評価—病棟実習期間および男女比からの考察—</p>			<p>，東京</p>	<p>の男女比によって，自己評価，実習成績に違いがあるか検討した。 病棟での実習期間の違いが女子のみの自己評価に影響を与えていた。また，男子の自己評価に差はなかったことから，母性看護学実習における女子の自己評価は，病棟実習期間や男子の経験を配慮することからくる技術経験の違いに影響すると考えられる。しかし成績には差がなかったことから，病棟以外の実習との組み合わせにより学習内容の補完ができていたと考える。 共同演者：友安由貴子，羽山美和，室津史子，<u>下見千恵</u></p>
<p>55. 新人助産師のつらいと感じる時期と回復時期に関する調査 (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2017年3月</p>	<p>第31回日本助産学会学術集会，徳島</p>	<p>新人助産師を対象に入職後のつらさと回復について明らかにすることを目的とした。つらかった時期は5月～9月と幅があり，時期を2回挙げる者も多かった。その要因は，仕事が回せず周りに迷惑，新旧の行動目標の重複時期，業務の一人立ち等があり，特に夜勤は共通していた。回復した時期は11月が多かった。乗り越えるきっかけには，同期助産師の存在，プリセプターからの評価や励まし，業務やケア技術の達成感等があった。この内，同期助産師の存在は全員が乗り越える要因として挙げていた。 共同演者：<u>下見千恵</u>，児玉史乃，築谷祐季，竹中和子</p>
<p>56. 育児期にある母親の飲酒実態に関する文献検討 (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2017年10月</p>	<p>第58回日本母性衛生学会，神戸</p>	<p>育児中の母親を対象とした飲酒率等について，主として国内文献の調査からレビューを行った。 共同演者：児玉史乃，<u>下見千恵</u></p>
<p>57. 妊産褥婦の冷えの対処方法に関する文献研究 (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2017年10月</p>	<p>第58回日本母性衛生学会，神戸</p>	<p>周産期の女性を対象に，冷えに関する文献検討を行った。 共同演者：松村綾乃，<u>下見千恵</u></p>
<p>58. 妊娠期から育児期を通した双胎児家族への育児支援に関する文献研究 (査読あり)</p>	<p>共著</p>	<p>2017年10月</p>	<p>第58回日本母性衛生学会，神戸</p>	<p>双胎をもつ家族を対象にその育児支援について，妊娠期から育児期まで縦断的に文献調査を行った。 共同演者：別役綾香，<u>下見千恵</u></p>

59. 乳児音声シグナルに対する心拍数変動パターンと PF スタディ反応の関連」	共著	2018年7月	第18回赤ちゃん学会学術集会, 東京大学	乳児と養育者の情緒的相互作用過程の支援につなげるために、乳児の音声シグナルに対する養育未経験者の心拍数の変動パターンと PF スタディの反応傾向との関連について検討した。 共同演者：竹中和子, <u>下見千恵</u>
60. 育児期にある母親の飲酒習慣者率に関する研究	共著	2018年10月	第59回母性衛生学会総会・学術集会, 新潟	育児期にある母親の飲酒実態から飲酒習慣者率を導き出し、飲酒習慣者の特徴や背景を探った。本研究における育児期にある母親の飲酒習慣者率は28.1%と高値であった。飲酒習慣者は社会的で、飲酒機会が子どもをもたない者より多いことが高値の一因として考えられた。子どもの数は行事の数と関連しており、飲酒の機会も増す背景が特徴としてあった。 共同演者：児玉史乃, <u>下見千恵</u>
61. 新人助産師の就業継続を支える要因に関する調査	共著	2019年10月	第60回日本母性衛生学会総会・学術集会, 千葉浦安	新人助産師の就業継続に影響した要因について分析した。聞き取り調査の内容より30のラベルが抽出され、9の大カテゴリーに分類された。様々な人からの精神的な支えや先輩からのアドバイスや評価による仕事での成功体験の自覚のほか、職場への慣れや自施設への肯定的評価、考え方を切り替えることも新人助産師の就業維持に関連していることが考えられた。 共同演者：田山文菜, 児玉史乃, 友安由貴子, <u>下見千恵</u> .
62. 育児中の母親のアルコール摂取量と飲酒理由に関する調査	共著	2019年11月	第39回日本看護科学学会, 金沢	育児中の母親のリスク者実態とその飲酒理由を明らかにすることを目的に聞き取り調査票を用いて半構造化面接を行った。本研究におけるリスク者は28.5%で一般女性に比し3倍以上高かった。リスク者は初飲年齢が早い傾向にあった。飲酒理由では、仕事や育児、夫へのストレスが最も多かった。 共同演者：児玉史乃, <u>下見千恵</u>
63. プレコンセプションケアに関する健康教育の内容と方法— 国内外における介入研究の文献レビュー—	共著	2022年3月	第36回日本助産学会学術集会助産学会, on-line 開催	本研究の目的は、プレコンセプションケアに関する健康教育の内容と方法について国内外の介入研究から得られる知見を整理し、妊娠可能

				<p>な年齢にある人々に必要な健康教育について示唆を得ることである。</p> <p>文献検索：国内文献は医学中央雑誌 Web 版を，国外文献は MEDLINE と CINAHL Plus を使用。WHO がプレコンセプションケアの POLICY BRIEF で示す「プレコンセプションケアパッケージ」の 13 領域を使用し，分析。</p> <p>健康教育の対象は女性，および学生にとどまっていた。男性や就業者などへ対象を拡大し，内容・方法を検討する必要がある。</p> <p>共同演者：川上 由佳，<u>下見千恵</u></p>
64. TPB を用いた Binge 飲酒に関する研究の文献レビュー	共著	2022 年 10 月	第 81 回日本公衆衛生学会総会，甲府	<p>Binge 飲酒の対策を検討するため，健康行動の変容に適用する理論 Theory of Planned Behavior (以下 TPB) を用いて Binge 飲酒の検討が行われた諸外国の文献レビューを行った。対象論文は横断研究 3 件，縦断研究 8 件，介入研究 3 件，メタ分析 1 件であった。Binge 飲酒に対する意図や態度は，Binge 飲酒行動を規定する重要な変数であることが確認されたが，それだけに着目した介入では十分な効果が得られにくいことも明らかになった。</p> <p>共同演者：岡田ゆみ，<u>下見千恵</u></p>
65. 更年期女性のアルコール摂取状況に関する文献検討	共著	2022 年 12 月	第 42 回日本看護科学学会学術集会，広島	<p>更年期の体調の変化と飲酒状態・飲酒の影響について，文献から動向と現状を明らかにする。女性の飲酒者率は横ばいであったが，50 代の飲酒者率が上昇していた。加えて，飲酒頻度や飲酒量が多い年齢層も，更年期に多かった。更年期女性の飲酒による健康への影響については，飲酒量が多いと更年期障害指数が高い，更年期障害患者の飲酒習慣者は 68.2% と高率であった。更年期以降の長い人生の健康につながるよう，予防的な介入方法の検討と，更年期女性の飲酒動向を注視していく必要がある。</p> <p>共同演者：<u>下見千恵</u>，船本彩美，岡田ゆみ</p>
66. 父親の親役割獲得に関するニーズ—父親役割獲得支援を行う効果的な	共著	2023 年 10 月	第 37 回日本助産学会学術集会，東京	<p>医学中央雑誌 Web 版で，「父親」「ニーズ」及び「父親」「育児」「役割」「行動」をキーワード</p>

時期と方法の検討—				とし検索した。これらの中から男性の育児等に関するニーズについて書かれてある7件を対象として分析を行った。パートナーが妊娠期の時期から育児期にかけて切れ目なく、父親に対して日頃から積極的に声をかけること、父親の代弁者となり、父親母親が互いの考えや気持ちを知ることができるように支援することなどが考察された。 共同演者：仲里茜音， <u>下見千恵</u>
67. 就労女性の仕事と妊娠・出産・育児に対する思いに関する文献レビュー	共著	2023年10月	第37回日本助産学会学術集会，東京	医学中央雑誌 web版を用いて、「原著論文」「就労女性」「妊娠」「思い」をキーワードとして検索した結果、妊娠中の就労女性本人の言葉がデータとして示されている文献を5件選択した。就労妊婦は、妊娠と仕事の両立に難しさや職場に対する葛藤、思いもよらぬ異常症状、不安など多くの思いがあった。しかし、パートナーや職場などの周囲の支えによって仕事を続けることができていた。 共同演者：藤田夕稀， <u>下見千恵</u>
68. 母乳育児支援による産後うつ予防の可能性に関する文献検討	共著	2023年10月	第64回日本母性衛生学会総会・学術集会，大阪	キーワードを「産後うつ」「授乳」，医中誌 Web で検索し19件を選定した。Web 検索で該当したエコチル調査1件を加え，エジンバラ産後うつ質問票（以下，EPDS）と授乳状況についてまとめた。因果関係は不明だが，母乳育児の実施状況や満足度と EPDS の結果に関連があり，順調な母乳育児は EPDS 陽性者を減らす可能性が示唆された。陽性者は母乳育児に対して不満足な思いや悩みがあるため，母乳育児支援のニーズがあり予防的介入が有効となる可能性がある。 共同演者：船本彩美， <u>下見千恵</u>
69. 飲酒教育に関する文献検討	共著	2024年10月	第65回日本母性衛生学会総会・学術集会，宮崎	医学中央雑誌 Web 版で，キーワードを「飲酒」「教育」，条件「原著論文」とし飲酒教育に関する25件を対象とした。成人では，過剰飲酒などに対する健康教育であり，予防的な内容及び女性を対象としたものは極めて少なかった。アルコールは依存性があるため，問題飲酒に至る前の健康教育を充実する必要がある。特に女性については，アルコールの影響を受け

70. 更年期女性の睡眠と飲酒に関する文献レビュー	共著	2024年10月	第65回日本母性衛生学会総会・学術集会, 宮崎	<p>やすいことや次世代への影響等, アルコール健康障害は深刻であり, 性別を踏まえた健康教育が必要である。 共同演者: <u>下見千恵</u>, 船本彩美, 羽山美和</p> <p>医学中央雑誌 Web 版で, キーワードを「更年期障害」「飲酒」とし目的に合致した2件と厚生労働省の「令和元年国民健康・栄養調査結果の概要」「更年期症状・障害に関する意識調査」を対象とした。更年期女性は他の年代と比較し睡眠時間が少ない上, 更年期症状の一つである不眠の解消が飲酒の動機として多かった。飲酒は中途覚醒や早朝覚醒の原因となり睡眠の質を下げる。また更年期症状を強める影響もあるため, 特に有職女性には飲酒に着目した生活指導が有用と思われる。 共同演者: 羽山美和, 船本彩美, <u>下見千恵</u></p>
(その他) なし				

(氏名 下見 千恵)

- (注) 1. 主要な学術論文等 (発行又は発表が予定されているものを含む。) について作成すること。
2. 「学術論文等の名称又は演題名等学術論文等の名称」の欄には、それぞれ年月順に、番号付して記入すること。
3. 「概要」の欄には、各学術論文等ごとに記入すること。なお、共著の場合は該当部分及び頁数を明記し、また、本人の氏名を含め著作者全員の氏名を当該著書、学術論文等に記載された順に記入すること。本人氏名には下線を付すこと。発表については、共同発表の場合には本人を含めて発表者全員の氏名を抄録に記載された順に記入し、実際の発表者に下線を付すこと。
4. 「その他」の欄には、翻訳、書評、資料紹介等を記載すること。その際、それぞれ区分し当該小見出しを記入すること。翻訳は、まず原著者名を書き、下段に邦訳の表題を記入すること。原著名の記入が必要な場合は「概要」欄に記入すること。

II 特色ある教育支援

教育上の能力に関する事項	年 月	概 要
1.教育方法の実践例 なし		
2.作成した教科書、教材 なし		
3.その他 なし		

III その他

なし		
----	--	--

(氏名 下見 千恵)

(注)「学術論文等」あるいは「特色ある教育支援」に含まれない業績について作成すること。(様式自由)